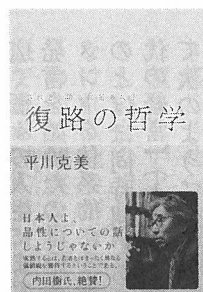




『復路の哲学——されど、語るに足る人生』

平川克美 著

夜間飛行 1600円＋税



「棺桶に片足をつつ込むというような言葉は、決して机上からは生まれなかった。経験が生んだものだ。これは面白い言葉だ、などと青年が言ったら滑稽だろうが、逆に、この言葉が味わえないような老年は不具な老年だと言ってもいい。

小林秀雄は『生と死』というエッセイでこう述べている。生きることに伴う切実な現実を言い当てていると思う。

評者も40を過ぎたためか、右のような人生観に痛いほどの共感を覚える。人生を登山にたとえるなら、ある意味登りは楽である。深く考えることはない。ただ馬力に任せて上を目指していけばいい。だが、いつしかそれだけでは足りないことに気づく。というか、ある年齢を過ぎたとき、それ以前の生き方が通用しなくなる。仕事においても同じである。おそらく30後半く

らいまでは、自分の力や才覚のみでやっていくことができる。しかし、一定の年を重ね、部下をはじめとして自らの責任の及ぶ人々が増え始めると、自分だけを考えていてはどうてい前に進めない。扱うべき要因が劇的に広がるためだ。教えたり、育てたりといった、自分以外の

ことを考えなければならなくなること。本書がまずもって存在価値を持つのは、何より刊行のタイミングの良さである。たぶん高度経済成長期やバブル、いやつい最近まで、ポジティブな価値を良しとし、精力的であることを多とする価値観が支配する世の中では、なかなか出なかった考

えである。著者は言う。「自分の行く末が地図のようにはつきりと見えてしまうという絶望を噛み締めたとき、人生の復路が始まる」。

復路？ そんな後ろ向きな感慨嘆されるだろうか。そうではないと思う。自分の行く末が見えることは、明らかに成長である。そして、自分の存在価値を徐々に下げていき、最終的にはいなくなっても誰も困らない社会や組織をつくるこ

と、それにまさるポジティブな姿勢はない。とくに40歳を過ぎるあたりでそのことが考えられなければ、小林秀雄風に言うなら「不具な中年」の入り口に立っているといっている。

本書は何かの連載をまとめたもののようだ。何か学ぶ目的を持って読む本ではない。内容は

まったく実務的ではないし、かといって肩を抜いて読むエッセイというものでもない。

文体も凝ったものではないにせよ、しかるべき緊張を伴っている。そこにはわかる人にわかればいいという突き放した爽やかな感じと、かといってこのシグナルを無視したときの代償の大きさが暗示されている。

評者は思う。すぐに読まなくてもよいから、この本をそつと通勤時の鞆にしよばせ、ふと思いついたときにぱつと開いた頁に目をはわせてみる。それだけで、あまり意識に上ることのない無数の思いがしゃぼん玉のように脳裏を漂うようになるだろう。そのとりとめのなさは、多くの場合、明確な言葉やコンセプトにはならない。それでいい。

人生とはそういうものだし、本書が言うように、「責任のないものについて責任をとること、それが『大人になる』ということ」なのだから。

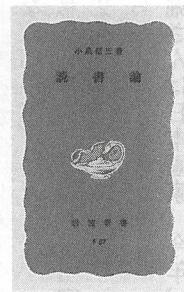
下りを想定したプランを



『読書論』

小泉信三 著

岩波新書 700円十税



もう60年以上も前の本ながら、きちんと流通しているのが何より本書の価値を証明しているように思う。たまたまラジオで作家の伊集院静氏がふれていたので読んでみたのだが、現代人のために書かれたのではと見えるほどに深い警世のメッセージに満ちている。

情報社会と言われるようになって久しい。それでも読書という行為はある意味で、人生そのもののメタファー（比喩）であることを痛感させられる。どこから情報を得てどのように活用するか。それが人生だということである。

あるいはこう言うかもしれない。人体の組成の大半は水とされる。ならば、どこからどのような水を摂取するかが人体を構成する要因ということである。同じように、情報や知識をどこからどうとるかが頭脳や思考様式を決定することになる。

水なら何でもいいというわけにはいかない。同じ水であつても下水と上水はまったく違うし、都会の水道水と奥山の石清水も違う。

少々長いが、著者の言を引用してみたい。

「人類の偉大なる産物は（略）無用なる読書、また無用なる思

すぐ役に立つものはすぐ役に立たなくなる

索の中から生まれたのであることを忘るべきでない。

先年私が慶応義塾長在任中、今日の同大学工学部が始めて藤原工業大学として創立せられ、私は一時その学長を兼任したことがある。時の学部長は工学博士谷村豊太郎氏であったが、識見ある同氏は、よく世間の実業家方面から申し出される、すぐ

役に立つ人間を造ってもらいたいという注文に対し、すぐ役に立つ人間はすぐ役に立たなくなる人間だ、と応酬して、同大学において基本的理論をしつかり教え込む方針を確立した」。

書物について述べているのだろうが、たぶん経済政策も教育も仕事もみんな同じなのだ。ものごとの価値の根本には成熟や蒸溜といった、上質性を担保するだけの時間の流れがなくてはならない。しかるべき無用の時間がなければならぬ。

考えてみれば、私たちはコンビニでものを買うときでさえ、

適当に買うことなどしない。自分の必要性や商品の良さをそれなりに吟味してお金を払う。

まして、人間や知識といった高度なものについて同じことが言えないはずがない。近年食品問題が噴出し、企業業績にまで大きなダウンが見込まれるけれ

ども、いちばん高価な価値の源泉である人間について促成して質を落とすなどあつてはならないことである。

評者は思うのだが、私たちはときどき「時代前の人たちのゆつたりした時間」を想像する機会をわずかでももっておいたほうがいいのではないか。経済が情報化し高度化していくのは一つの必然の流れだとしても、人間までもが情報論的にとらえられ、要不要で価値が即断されるのは明らかに社会的害悪のほうが大きい。

さまざまな英断と直言で知られる著者だけにその思いを強くする。

「すぐ役に立つ人間はすぐ役に立たなくなる」とは至言である。同様の意味において、すぐ役に立つ本はすぐ役に立たなくなる本であるといえる。（略）すぐに役に立たない本によつて、今日まで人間の精神は養われ、人類の文化は進められてきたのである」。

社会生態学研究者 森里陽一



『ペンタゴン式 目標達成の技術』

カイゾン・コーテ著／中津川茜訳
幻冬舎 1100円＋税

自己啓発書にも時に「当たり」と言えるものがある。

評者が本書を手にしたのは半ば偶然であり、知人がある出版社に紹介した本ができたので見てほしいと手渡されたためだった。

この種のアメリカ人が書いた自己啓発書は一期かなり仕事柄読まざるをえなかったこともあり、正直なところ辟易だった。それに、たいていは主張するところは同じで、二度読むに耐えうるものはほとんどないというのが率直な印象だった。

だが、どんな本もめくってほめるものである。なかなかよくできている。何より訳文がいいのか、いわゆる「入ってくる日本語」である。

それに、主張ポイントに奥行きがあって、読み手の知りたいたいことが、時間が経つほどにじんわり浸みしてくるという温泉に似た境地に達している。二度以上



読みたいと思わせる自己啓発書はこの惑星にさほど多いとは思えない。

持ち味は、すべて頭の中だけでねつ造されたものでないという点に尽きるところ。レモンの果汁をしつかりと搾り取るように、著者の体験と思索のエッセンスが適切に開示されているの

二度読むに耐えうる本

を感じる。
『悪魔の辞典』のピアスの言葉「博学、それは学問に励む人間が陥る一種の「無知」である」が引用される。この一文は本書の主張内容を的確に表現していると思う。

一般にビジネス書のスタイルで多いのは、考え方を変えよというものだ。あるいはその系と

して、言葉を変えよ、口癖を変えよというものもある。いずれにしても、思考上の習慣を変えよとする点で共通している。

この本が独特なのは、今まであまり自己啓発でかえりみられることの少なかった「身体」に着目するところである。実際にペンタゴン（米国防総省）で活用されている方法というのだから、いかにして「マインドフル」な状態を現出させるか、そのための身体運用の仕方や瞑想などの方法についてもかなりページ

数を割き、かつ初学者にもわかりやすい説明が行われていると思う。

確かに先のピアスの引用文ではないが、知識の多さや深さが人としての満足感に直結するわけではない。

現実には、豊富な知識を持ち、世間的な成功を手に行っている人の中にはいつもいらした

り、精神的不調に悩まされる人も少なくない。

おそらく、理由は頭脳だけですべてを処理しようとするからである。かのイエス・キリストも福音書の中で軍人の廉潔さや正直さを褒めているくらいだが、軍人ほど身体と頭脳の連携が求められる仕事も少ない。

この本では、呼吸法をはじめ、瞑想の方法など、心の動きに直結する身体形式に着目した方法がたくさん出てくる。

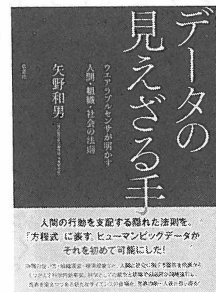
確かにペンタゴンには超優秀な人たちが無数に参集する印象があるが、実際は逆で、ある方法を体系的に実践する結果としてペンタゴンは人材の宝庫となったのだと知る。

しかも、一つひとつがシンプルで、本を手にしたまま実践できる。なかなか本を一冊読んだくらいで得られるものは一般に限られているが、即効性が高くてかつ実践が容易な知見が選りすぐられて開示されているのを感じる。



『データの見える手——ウェアラブル センサが明かす人間・組織・社会の法則』

矢野和男 著
草思社 1500円＋税



刺激的な書物である。読みながら「なるほど」と思うたびに棒を一本引いて、「正」の字になるようにメモしていったら、何個「正」ができてしまうのかと思うほどに、野心的で未来志向の知見が溢れている。新しい世界はこうして開かれていくのだとしみじみと思った。

著者は日立製作所の研究者である。「リストバンド型のウェアラブルセンサ（ライフ顕微鏡）」を使って、人の体の動きを逐一データにとったところ、今まで知られていなかった新しい知見が多数見出されていく。

この展開が生半可のSF小説よりはるかにおもしろい。データの検討の結果、著者は次のように言う。

「そこには『繰り返しの力』という我々が普段感覚として意識していない力が、社会を動かしている姿が見えてきたのだ」。私たちは自由意思で行動して

いると思っている。

本当なのだろうか？

よい問いとは必ずしも斬新な問いではない。反対に、よい問いとは言われてみれば何ということもない問いである。なぜそんなことを考えずにきてしまったのだろうかという問い、当たり

技術はこうに使えればよい

前の風景の成り立ちに新しい光を与える問いこそがよい問いの条件である。著者は続ける。

「人は因果という枠組みに頼って世界を認識しようとする強い傾向があるが、因果という考え方は、多数回の繰り返しの結果を見通すには適さないということなのだろう」。

なるほど。そのとおりであ

る。確かに私たちは因果の枠組みで世界をとらえたときには、はじめものがわかったような錯覚にとらわれている。

だが、人間の行動の大半は無意識であって、必ずしも意識的な検討を経っていない。むしろ体の動きというのは、無意識の結果なので、そこを科学することによって、知られざる暗黒大陸の少なくとも一端が明らかにされるのではないだろうか。

特に誰もが関心を持つのが、「幸福」である。この問題には、本書は相当程度のエネルギーを割いている。次の知見があまりにも印象的である。

「幸福な人は、仕事のパフォーマンスが高く、クリエイティブで、収入レベルも高く、結婚の成功率が高く、友達に恵まれ、健康で寿命が長いことが確かめられている。定量的には、幸せな人は、仕事の生産性

が平均で37%高く、クリエイティビティは300%も高い。重要なことは、仕事ができる人は成功するので幸せになる、というのではなく、幸せな人は仕事ができるということだ。そして、ハピネスレベルを高めるのは、成功を待たずとも、今日ちよっとした行動を起こすことで可能なのである」。

ともすれば私たちは幸福になるために、成功するために、「考え方」を変えようとする。世の中の自己啓発セミナーがたいはいは何の益も生まないのは、おそらくそこにあるのだろう。

むしろ幸福度を上げるためにすべきことは、体を動かすこと、動きを変えることなのだろう。

この本は科学の体裁をとっていないが、科学の本ではない。人間と社会についての本である。技術がどのような貢献を人間に對してなしているのかを示した点で一つの時代を切り拓く可能性を秘めた書物と言ってよい。

社会生態学研究者 森里陽一



『雨夜譚』

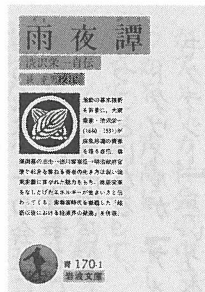
以前から不思議に思っていたのだが、日本資本主義の父ともされる渋沢栄一の書いたものがさほど読まれていないのはなぜだろうか。

理由の一つとして考えられるのが、理財に強かった彼が残した書き物が、一般人の求めるものと異なっていたことがあるだろう。

本書は渋沢の人間の側面、しかもかなり血気盛んな青年時代を生きた生きた振り返った回想にふれるにあたって、右に出るものはないといえる。

近い時代を生きた人に福沢諭吉がいる。『福翁自伝』を昔読んだとき、あまりの型破りに痛快な驚きを覚えたものだが、渋沢によるこの自伝は、その印象にかなり近いものがある。

共通するのは、いわゆる「夜話」という形式をとっている点である。堅苦しく書き下ろされたものではなく、人々を前に



ゆったりと数夜にわたって語られた速記をもとにしている。

渋沢は江戸時代の人で、農民の出身だった。そんな彼がいっしか天下国家を論ずるようになり、やがて野心を抱き、京都で一橋家に取り立てられて理財で才能を発揮する。

それだけでも奇跡なのに、徳

転換期に処する

川昭武に随行して、パリの視察団にも参画し、さらには、明治政府にも入っていくというめくめくスリリングな物語である。

読んでいて感じるのは、渋沢の自称「凡人ぶり」である。五〇〇に及ぶ金融機関や企業、組織の創設に着手した巨人という一般にもたれるイメージとは裏腹に、本人にはさしたる偉業を

渋沢栄一 著
岩波新書 900円十税

行った自覚がない。

折に触れて、「自分は農民の出身であるから」という前置きが出てくるのだが、おそらく衷心からのものであろう。

明治政府に取り立てられた者の多くは下級武士だったとされるが、渋沢はさらにその下だった。

彼は若いころのエピソードを紹介している。故郷の深谷で藍の売り買いをやっていた少年時代に、地元の代官に侮られたという。そのときに、こんな人が

たんに身分というだけで威張っている社会はろくなものではないと実感したという。

江戸時代という封建的な体制から、大きく時代は変わり、有意な人材が稀少な時代になっていくなかで、渋沢はめきめきと頭角を現していく。

本書はゆったりとした語り口もあるけれども、いわゆるサク

セスストーリーのような生臭さがいつさい感じられない。謙虚であつたというよりも、屈託がなかったのだと思う。

現代を見るとき、気付かないうちに、渋沢が生きたような、原理を異にする一つの時代のちようど谷間にきているように感じられなくもない。

明治維新は外圧から日本が国を開くという過程であつたわけだが、現代は人間の意識がいっせいに内側からこじあけられて、気付けばイスラム世界の騒擾が自分の生活圏内とほぼ同等の重みをもつようになっていく。

たぶんそのときに必要なのは、能力でも才能でもない。野心でも向上心でもない。積極性でさえない。

内省する力、そして勇氣をもつことだ。

渋沢の自伝はそのことを今の私たちに教えてくれる。しかも、大仰でなく、おじいさんが昔話をしてくれるような、やさしく、心地よい口調で。



『ライフワークの思想』

外山滋比古 著

ちくま文庫 560円＋税



いくらか歳をとったせい、
たんに馬齢を重ねたせい、こ
れまでのことと同時に、これ
らのことが頭に浮かぶ。

雑多に浮かんでやまぬ想念に
対して、かりに一つの問いを
与えるなら、たぶん「ライフ
ワークって何だろう？」が適当では
ないかと思える。

人は誰しも何かしらの活動に
従事している。会社、経営、芸
術、家事、勉強……。いずれも
社会の中で必要なものだ。

だが、ふと考えてみると、特
に40という人生の折り返し点を
過ぎてから考えてみると、どう
も日々のミクロな課題だけを見
ているのでは満たされない何か
が残るのは私だけではないだろ
う。

古来賢人は40にして惑わずと
言ったけれども、たんに人生観
がぶれないというよりも前に、
天命に思いを馳せるスタート地
点なのだと言いたかったのかも

しれない。著者は言う。

「バーテンダーはさまざま
酒をまぜてシェーカーを振れ
ば、カクテルをつくることで
きる。これを飲んだ人は酔っ
ぱらうから、彼が酒をつくったよ
うな錯覚を抱くかもしれない。
しかし、じつは一滴の酒もつ
くってはいないのである」。

カクテルと地酒

考えてみればそうである
(もつとも、バーテンダーの名
誉のために言えば、腕のいい
バーテンダーだって得難いもの
で十分価値あるものだと思うが
……)。

「酒でないものから酒をつ
くった時、初めて酒をつくった
といえる。(略)かりにドロク
でもいい、地酒ができれば、そ
れが本当の意味で人を酔わせる

酒をつくったことになる」。
ここで著者が言いたいのは、
たんにオリジナルなものをつ
くれないことではないと思う。

どんな人生であつても、(そ
れが華麗であれ、さほど華麗と
は言いがたいものであれ) たつ
た一つのかげがえのない人生で
あつて、時による熟成をへて、
自分にしかない何かができるは
ずだということである。

できた酒は決しておしゃれな
香味やなめらかな口当たりのも
のではないかもしれない。それ

でも、自分の中で蒸溜した酒を
つくること、それがライフワー
クなのだという。

ライフワークという、何か
おおげさなものをつい想像して
しまふ。あるいは逆にものすご
く陳腐なものも想像してしま
ふ。

ところで現在という時代の最
大の特徴は、寿命が延びたこと
である。そもそも40歳が人生の

折り返し点など、つい最近のこ
とである。ちょっと前などは40
歳で長老という年齢だった。

「我々は、地酒をつくること
を忘れて、カクテル式勉強に熱
中し、カクテル文化に身をやつ
して、歳をとってきた。そして
いま、自分の努力によってでは
なく、思いもかけない周囲の事
情によって、自由をもつことに
なった」。

味方にできるのは時間なのだ
と知る。きつと人はもつと過去
を思い起こすべきなのだ。10代
のころ、20代はじめのころ、何
を考えていたのだろうか。あた
かも、洞窟で寝かされて、その
まま忘れ去られてしまった樽は
心のどこかにないだろうか。

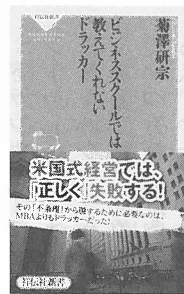
雑纂であつて、気軽なエッセ
イである。決して、みけんに皺
を寄せて読むような高尚で哲学
的な本ではない。特に中高年に
達したなら、ほんの少し立ち止
まって頭を休めながらも考える
べきトピックがいくつもある。
たくさん驚きがある。



『ビジネススクールでは教えてくれないドラッカー』

菊澤研宗 著

祥伝社新書 780円＋税



経営学とはどのような学問なのだろうか。経営と一言で言っても、対象はあまりに広い。規模によっても経営の方法や範囲は異なるし、業界によっても違う。要は人間が各人各様なのとまったく同じで、企業に対して一般普遍に妥当する法則は存在しないように思える。

いつからかMBAの取得が「できるビジネスマン」に選好されるようになり、学問と実務のあわいに当世の出世欲と野心がスパークするようになっていく。もちろん野心や向上心は人間にとってなくてはならないものののだが、果たしてビジネススクールで教えられている知識や方法が、どの程度学問的貢献をなし、ひいては実務的な貢献をなしているのかは看過されてよい些事とは言えない。

軽く手にとれる本だが、その意図するところは果てしなく広く、しかもラディカルな問題意

識によっている。たとえば、冒頭で次のように述べている。

「今日の米国では『実証主義的な科学的経営学』がまかり通り、市場も支配できるという傲慢な発想にまで発展しているのだ。それがリーマン・ショックを導

経営学は貢献可能か

かもしれない。

いた原因の一つかもしれないと思った。そして、この米国流の疑似科学的な経営学から、ドラッカーの経営哲学をも許容する日本の経営学をどのようにして守るべきか。いかにして科学主義に負けないようにするか。経営の問題は、おそらく経済学以上に世の中のマインドに対して力を持つ面がある。理由の一端はその「わかりやすさ」に

ある。マクロ経済について語るだけの知識がない人でも、大会社の経営について語れる人は決して少なくない。あるいは、自分の会社の経営状況についてなら、よほどのことがなければ語る人が大半だろう。

つまるところ、経営の問題はあまりに身近でしかも切実なのである。それだけに影響力が大きい。このような評論や助言のしやすさが、MBAやコンサルなどの伸張に手を貸してきたの

かもしれない。

「平凡な経営学者やコンサルタントの助言に従って、経営者が経済合理的なマネジメントだけを展開すると、いつかどこかで正当性を無視して経済合理性を追求し、長期的利益を無視して短期的利益を追求し、全体を無視して個別合理性を追求して失敗するような不条理に陥ることになる」。

そして、著者は力強く言う。「このような不条理に陥らないために、実は科学的な経済合理的なマネジメントとは別のマネジメントが必要なのだ」と。その一つが、ドラッカーが展開している哲学的で人間主義的なマネジメントである。

本書は単に、経営学の科学主義を批判し、ドラッカーの人間主義を称揚するのではない。それ以上に、安直な科学主義が世の中を傷つけるリスクと、経営するものが哲学と理念を持つことに伴う発展の可能性にまで目が配られている。

そして、いずれもが、著者自ら見聞してきた体験や、考察によつて裏付けられている点が本書に高い説得性と豊かな色彩を与えている。

現在のところビジネススクールで教えられることに、大きな変化はないようにも思える。だが、ゆっくりと確実な変化が底流で起こっていることを教えてくれる一冊である。



『逆転のメンソッド』

原 晋 著

祥伝社新書 780円十税



時々思うのだが、スポーツがビジネスに似ているのではない、ビジネスのほうがスポーツに似ているのではないか。

日本でも昨今そうなりつつあるけれども、アメリカにはスポーツ選手出身でビジネスで大成している人が多くいるという。たぶん、ビジネスの世界の成功ポイントはスポーツでも似ているのだろう。

団体スポーツの場合、組織の力を最大化するところにそのことが言えるし、何より、すべてが人間的要因に貫かれているところがあるだろう。そう考えると、スポーツは、組織マネジメントの箱庭のような意味をもっているのだ。

本書は青山学院大学の駅伝を箱根駅伝優勝に導いた監督によるものである。著者は選手時代を経てから、電力会社の社員となり、リスクをとって大学スポーツの監督になった。

学生スポーツにおける指導者のもつ力量はそのままチームの強さに直結する。どんなに選手の力があっても、指導がまずければ強くはなれない。厳然たる事実である。

「私の陸上競技での指導も、

スポーツの普遍性

選手の首根っこをつかんで引きずりまわすようなスタイルではなく、その選手の課題に応じたキーとなる言葉を示して成長を促すというスタイルを採っている。したがって、コミュニケーション能力が高くないとおそろくついて来られないだろう」

「大事なものは、まず動くことだ。動いていれば、ノウハウは自ずと身についてくる。実際に

営業をやってみてわかったのは、現場で交渉相手と膝を交え、面と向かって話し合うことの重要性だった」

筆者が指摘することは、いくつもの現実世界への示唆を含んでいる。それというのも、大学スポーツを社会から眺めていることがあるためだと思う。社会人出身の指導者の強みはそこにある。アウトサイドから見る能力である。

さらにはどうスカウトする

か、ミーティングをどうするか、ひいてはどのような生活態度をもつか。哲学の実践がかくも現実にもつのだという圧倒的な事実には打たれる。

筆者は芯の強さとは、個々の選手の内面に潜んでいるのだと言う。内面にある覚悟をどう引き出すかは、著者自身の覚悟、すなわち、すべてを投げ捨てて指導者の世界に飛び込んだ次の

発言に十全に表れているように思える。

「私の側からの要望として次のようなことが記されていた。・3年間の出向および休職しての指導は、中国電力と青山学院大学との関係が今までないので無理である。

・したがって、退職して就任するしか方法はない。

・もし、3年間で結果を出した場合、3年後の身分の保障をしていただきたい。結果が出ない場合はその必要はない」

一つひとつは合理的でありながら、人間やコミュニケーションの微妙にふれるものでもある。しかも、選手を見る目線なども、高度に総合的であって、「足がいくら速くても他人の話が聞けない人、とくに性根の曲がった人は遠慮してもらえない」といった深い人間理解を伴う言葉がいくつに散見される。

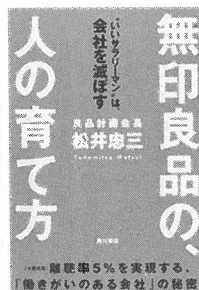
スポーツのもつ普遍性を凝縮した一冊と言えるだろう。



『無印良品の、人の育て方』

松井忠三著

株式会社KADOKAWA 1300円十税



世の中にはものすごく存在感があるわけではないのに、何となく好印象をもたれている店や会社というものがある。

想像するに、無印良品はそんな会社のかなり上位に位置するのではないだろうか。目立ちすぎない。それでも静かで感じのいい存在感を漂わせている。

この本は良品計画を現在の成長軌道に乗せた経営者によるものなのだが、「企業は人なり」と言われるとおりで、しつくりとなじんだ企業風土がどのようにつくられてきたかがよくわかる一冊となっている。

経営者による本は大きいって二つに分かれてしまう。一つは精神論や哲学を中心に据えたものであり私の印象では世の8割程度はこちらに属するだろう。強いリーダーシップ、積極性、前向きなどの威勢のいい言葉が並び、あえてひとりで言え

ば、「自分のやったとおりによれば誰でもうまくいく」と暗に主張しているように感じられる。もう一つは、精神論はまず棚に上げておいて、どうすれば上首尾にものごとを運べるかにこだわりのある本がある。

社会全体が学ぶべき

この種の本は、経営者をはじめとするマネジャーを機能的に捉えており、簡単に言えば、「その人がいなければ回らない」仕組み自体が組織にとつて有害なのだという考えがベースにあるように感じられる。

本書は明らかに後者、しかもきわめて健全かつ良質な種類のスキルやノウハウを、豊かな文化的背景のなかで語っていくの

を特徴としている。

たとえば、「仕組みれた修羅場」が人を成長させるという主張がある。確かに、働くということは、ある晴れた昼下がりに土手にたんぽぽをつみにいくのとはわけが違う。毎日がトラブルの連続である。言い換えれば、働くということとは、葛藤のなかに身を置くことそのものである。

著者の言う「仕組みれた修羅場」とは、意識的に働く人のなかに葛藤を引き入れることの大

切さに気付き、実行していることを意味する。

聞いてみれば何ということはないかもしれない。しかし、葛藤を仕組み化するというのは、ものすごく細やかな配慮と知性を要するであろうことは、実際に修羅場を生きた経験のある人なら誰もがわかるだろう。なぜなら、修羅場とは「計画できない」ことの別称であって、

修羅場を計画することそれ自体重いくびき意味するからだ。ほかにもある。「部下からの

反論は8割正しい」「絶え間ない異動が人を育てる」「入社3年で店長を任せる」「海外短期研修は計画づくりから本人任せ」など、すべてが「どう葛藤を通して人を成長させるか」に貫かれている。

先に本書は機能的な書物だと述べたが、正しい意味での機能的な考えとは、健全かつ穏和な精神の持ち主にしか提示できないものである。というのも、機能とは日々の現実からのデータとチメントがなければかたちを与えることが難しい種類の知識だからだ。

私はそこに著者のすぐれた人柄と心理的成熟、そして良識を見る思いがする。

あえて言えば、日本には人材しかない。人材以外に見るべき資源はない。私には社会全体が良品計画から学ぶべきもののように感じられる。



『一神教と国家―イスラーム、キリスト教、ユダヤ教』

内田 樹・中田 考 著
集英社新書 760円十税



近年イスラーム関連の諸国を遠因とする事件が国際ニュースのトップを飾ることが多い。

最近ではドイツに向かう難民問題がそうだった。

しかも、すでに国際ニュースと国内ニュースを分かつ決定的な柵というものがなくなっている。何が自国に関係し、何が関係が薄いかなど当座わかるものではない。ある国で発表されたささやかな経済指標が回り回って自分の生活に跳ね返るのが何ら不思議でなくなっている。

まして、日本のような貿易や人材を中心に成り立っている国は、地球のどこかで起こった些事に見える事件が大きな影響を持つ可能性が高い。逆もまた真なりである。

だが、日本においては、大きな事件が頻々と報じられているにもかかわらず、さしたる関心や情報収集が行われていないのが、イスラームである。グローバ

ル化がさまざまなところでかまびすしく言われるわりに、イスラームを影響力ある変数としてとらえる機縁に比較的乏しいのはなぜだろうか。

イスラームはグローバル化の対象外なのだろうか。そんなはず

私たちが知らないもう一つの世界

がない。人口としても経済的にも文化的にもイスラームほどの伸長勢力は存在しない。にもかかわらず、理解しなければならぬ相手なぜか無意識に異質なものである。思考から切り離して見るようにさえ見える。ISが典型だ。

答えは簡単だ。本当は見たくないのだ。影響を知っているからこそ、理解したくないのだ。

理解すると行動の責任が生ずる。

本書の興味深いのは、「なぜ私たちがイスラーム関係にアンテナを立てずにいるのか」というメタ的心性からはじまって、イスラームをどことなく異質なものとしがちな歪んだマインドに快い一撃を食らわせてくれるところにある。

対談形式で進められるのが、本書の妙味を十分に引き出しているように思う。

切れ味鋭く、しかも奥行きある思考を持ち味とする内田樹氏、そして日本でも最高のイスラーム学者の一人である中田考氏の話が、おもしろくないはずがない。

読み進めているうちに、自分が置かれた環境のほうがむしろ異質なのがわかってくる。良い本にはこのようなささやかな「コペルニクスの転回」を促すし

かけがそつと埋め込まれているものである。

そもそものがイスラームとは何かにはじまって、シーア派とスンニ派の違い、ハラール、マツカ巡礼などの芳醇な文化的背景を踏まえていねいな用語解説、さらに一神教と多神教などの宗教談義はスリリングな知的滑走を体験させてくれる。

「あれはこういう意味だったんだ」と過去に蓄積した知識や情報に新しい光が当たり、はつとさせられる。

現在グローバル化と呼ぶものの多くは、じつに狹隘で、時にイデオロギッシュなものなのだということに気付かされる。

すくなくとも、イスラームについての理解と配慮なきグローバル思考は、世界の半分しかとらえられていない。

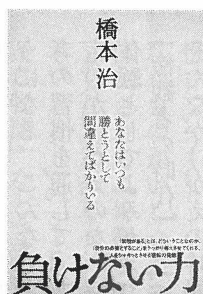
そんな当たり前の常識がたんと述べられているところに本書の魅力がある。そして真の専門家はどこまでもたんととしているものなのだ。



『負けられない力』

橋本 治 著

大和書房 1400円十税



「人間にとっての正しいあり方は、『勝とう』と考えるよりも、『負けられない』と考えることだということなんです」――。

世の中には何かを教えようとする本がある。その種の本は世の中に多い。というか、本を書くなどと思う人は、誰かに教えたくて仕方ない種族なのだから当然かもしれない。

一方で、ごく稀ながら、教えるのではなく、学んでいただくというスタンスの本もある。後者は勇気がいる。「教えるつもりはありません。何を学ぶかはあなたの自由です」というのは著者に最も繊細な知性を要するメッセージである。

橋本治さんの本は後者である。しかも裏切らない。成熟した知性のありかを示してくれ。これは本書についてささやかながら保証できる数少ないことのひとつである。

何度も示される基本的な姿勢

がある。「役に立つ本ではない」というメッセージである。

「役に立たない？」

そもそも役に立たない本を誰が手にするのだろうか。出版社はしかるべきコストをかけ、書籍を制作し、流通させ、印税を

「役に立つ」、「役に立たない」の間

払っている。役に立たないなどと公言する本をいったい誰がお金を出して買うのか。というか、経済的に成り立たないのではないだろうか。

あるいはこう思うかもしれない。世の中は役に立つと強く主張する本にあふれている。かえって殊勝に役立たないというメッセージが逆説的に他の本よりも一歩抜き出る要因になる

のではとの読みがあつたのだらうと。

だが、役に立たないと著者が言うのは、決して美しい謙遜でもなければ、レトリックでもない。「ほんとうのこと」である。

もちろん評者は本書で示される知性を安直に要約などしたくない。世の中にはあえて要約されないことよってしか示しえない種類の知性というものがあるから。

しかしながら、今ちよつと前

までとは違う様相で、世の中が急ぎ始めているように思える。本当であれば、時間をかけてなされるべき国民的合意が、電子レンジでチンされるみたいに、わずかな時間で形成されたかのように扱われている。「乗り合い馬車のコンセンサス」(村上春樹)が、あちらにもこちらにも組まれて、どことなくどこかで見えたような暗鬱な風景が繰り返

広げられている。

乗り合い馬車のコンセンサスが形成される時代の背景はだいたい共通している。自己主張が奨励され、勝ち上がることを善とする価値観である。

それでも著者は何がよくて何が悪いかということをもそも議論しない。どうあればよいかと助言もしない。ただ、語る。ゆつたりと。

ある意味で語り口自体が、一つのメッセージを内に含んでいる。ぜひその語り口に耳を澄ませてみてほしい。著者の提供する浴槽に身を委ねてほしい。温泉につかるみたいに、日ごろの考えを棚上げして、今の自分が何が本当に必要なのかだけを考えてみてほしい。

温泉の効能は一つではない。そもそも温泉に出かけていくという行為の中に、効能が含まれている。著者の語る言葉の多義性というか、いろんな響き方を

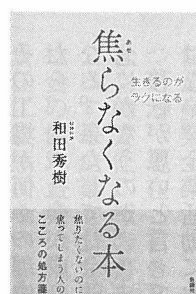
最大の持ち味だ。



『焦らなくなる本』

和田秀樹 著

新講社 1300円＋税



読んでいて、とても共感させられるところばかりだった。しかも、その多くは世間で語られるポジティブ思考とおおむね真逆になるのがおもしろい。実はこの著者との付き合いは（もちろん一読者としての）かなり長いものとなる。

評者が高校生だったころ、画期的な受験本を何冊も出されていて、ちよつとしたファイバーが起こつていた。それまでの受験成功法とは全く異なるものだった。以降精神医学者としての著書もそれなりに興味深く拝読してきたわけなのだが、はつきりいうと評者は本書が最も読んでいる楽しく、かつ身につまされるところが多かった。

「焦らない」――、たったこれだけのことが、次のような効果を生むという。
・自分が本当にやりたいことを見つけられる。
・周囲の状況に惑わされない

で、冷静に自分の行動を決めることができる。

・信頼してくれる人が少しずつ増えていく。

・自分にとって大切なものと、そうでないものの区別がはつきりつくようになる。

たやすく見えることほど難しい

・人生の目標をどんなに遠くにでも置くことができるようになる。

近年、社会があらゆるものにスピードを求めるようになっていっている。焦ることを強いている。だが、冷静に考えてみると、焦って私たちは何を求めているのだろうか。どうして、世の中はこんなに焦るようになってしまったのだ

ろう。焦りは人から時間と判断力を奪う。

「オレオレ詐欺」などでは、まずは相手を焦らせて思考の自由を奪ってから、人を意のままに動かそうとする。

いうまでもなく著者は医師であるから、きわめて合理的であり、客観的であり、いわば科学的精神の貫徹した専門家である。しかも本務以外にも、著作や映画製作など多面的な活動で知られている。

その著者が断言する。焦つてうまくいくことはない。かえって失うことが多いのだと。

「いつやるの?」……「今でしょ!」

みたいな一時流行したフレーズなどにも世相はよく表れている。あるいは、30歳になったからとか40歳になったからとかで、自分に年齢で過剰なプレッシャーをかけるのもしばしばあ

る。

いずれも、そこから不安やいらぬなどが生まれ、結果として視野狭窄により、かえってとるべき選択肢が減り、適切な行動がとれないことになる。

こうした視野狭窄に伴う「焦りの心理」を日常生活の場面に置き換えて教えてくれる。対処法も明かしてくれる。ちよつとしたことである。そのちよつとした、たやすく見えるものが、とても難しいのだ。

愛ある人は、相手を焦らせない。むしろ相手に考える時間を与える。しっかりと考え抜くことを推奨する。大切なことほど時間がかるのをよく知っているからだ。

この本を読むと、焦らないということがいかに現代において難しいことがわかる。同時に、焦らないことが、現代でいかに生き産性を上げるうえで、いかに確実に身に付けるべき姿勢たらざるをえないかもわかる。